"偉いぞ〳〵"と文相褒めちぎる

上機嫌で"眠り病に用心せい"

速記兄弟を

福岡から上京して、中根式速記競技第五回大會に出場、その天才ぶりに觀衆を驚かせた福岡市奈良屋小學校五年生石村善助君(一一)と三年生善治君(八)の兄弟が二十六日午前十一時文部省に出頭、松田文相の前で手練の速記術を見せた、この競技會に

優勝 した兄さんの福岡商業五年生善兵衛君(一八)が優勝旗を持ち、福商の選手三名も、大臣の前に立つ感激で直立不動である、小さな二少年を前の椅子にかけさせながら「ファーム」と唇で感心した後「さあ書いて見い」といつて

お父つさんやおつ母さんに孝行をして、先生のいふ事をよくきいて、えらい人間になつて、將來――將來つて言葉知つとるか?フム――日本の國を世界中に一番えらい國にしなければなりません!

兩少年が速記を復誦し飜譯する「どら、見せい」と手にとつた後「今度はこれぢや」と戸棚から國語讀本を引つぱり出して來た

豐臣秀吉が朝鮮に向はせた先手の大將は加藤清正、小西行長の兩名でした――

とすつかり小學校の先生氣取りで

朗讀 を始めた「えらいぞえらいぞ、よく出來た」とすつかり賞めあげ、歸りがけに「御苦勞さん、あ、それから、そら、眠り病よ、要心せいよ、今流行つとるさうぢや――」と大機嫌であつた

【寫眞は松田文相の前で手練を見せる善助君(左)と善次君】

「朝日新聞 昭和10年 8月27日」